

新たな旅が始まりました。旅好きの私のことです、未知の世界への旅立ちは何やら心が弾みます。向こうへ着いたらすぐに宇野さんを訪ねます。もう一度あの厳しい演出を受けたいと長い間願ってきました。でもね、宇野さん、私はあなたよりずっと長く生きて経験を積んできましたからね、昔のデコじゃないですよ。「デコ、お前ちっとましになったな」と言われたくてこれまで頑張ってきたんですから。腕が鳴ります。杉村先生とももう一度同じ舞台を踏みたかった。どんな役でもいいからご一緒したい。ワクワクします。

両親に挨拶するのは二、三本舞台をやって少し落ち着いてからにします。それからは裕ちゃんや和枝さんと思いきり遊びます。

これが別れではないですよ。いつかはまたお会いできますからね。

それでは一足お先に失礼します。皆さまはどうぞごゆっくり…

## 奈良岡朋子

(註) 宇野さん：宇野重吉、デコ：奈良岡の愛称、杉村先生：文学座の杉村春子さん、裕ちゃん：石原裕次郎さん、和枝さん：美空ひばりさん

私が死んでも絶対葬式はやるな、これは私の遺言だ、と奈良岡朋子は常々言っていた。その口調は宣言にも似て強かった。だからこんな形でしかご報告できないことをどうぞお許してください。

白いタンスの上に彼女は小さな祭壇めいたものを作っていた。両親の写真に並べて、杉村春子さんの扮装写真、石原裕次郎さんのプライベートスナップ、美空ひばりさんの楽屋の写真が飾ってある。宇野重吉先生の写真は、無い。滝沢修先生から頂いたという綺麗なグラスに水が入っている。たまたま起きぬけの彼女を見たことがあった。彼女はグラスの水を替え祭壇に手を合わせた。唇がかすかに動いている。目を閉じた彼女の横顔が忘れられない。どうせ、もう少しだけ舞台をやらせてください、とでも祈っていたのだろう。

彼女の演技には客観性がある。戯曲の読み込みも深い。ダメ出しに応じてたちどころに一から十まで変えて見せる確かな技もあった。そしてここぞという一瞬にダイナミックに気持ちを籠める。冷静さと計算と感情を優れたバランスで持ち、表現できる稀有な女優だった。叔母を亡くした悲しみよりもあの演技を二度と見ることができない寂寥感の方が強く私を襲っている。

稀代の晴れ女でもあった。今日の劇場の搬入口は屋根が無いので奈良岡さんお願いしますね、と言うと、任せときなさい、の一言で本当に雨が止む。止むどころか真夏にピーカンにされたこともあった。ところが亡くなった3月23日の夜は雨だった。小糠雨に打たれながら、ああ、もういいや、と奈良岡さん思ったな、と私は呟いた。

奈良岡朋子、享年九十三歳、満開の桜の下、ほぼ七十五年にも及ぶ舞台人生の幕がおりた。

丹野郁弓